

▶寺の息子として誕生

山形国民新聞は、斎藤秀一を解雇した学校長の不当行為を報道しました。友人の中には、名誉毀損で訴えるようにと勧めてくれる人もいましたが、特に行動に移すということはしませんでした。特高警察にまともな道理など通ることはないだろうと、その本質をしっかりとつかんでいたのです。

秀一は鶴岡市を出ることなく、読書と執筆中心の生活になりました。庄内方言の研究に力を注ぎ、「庄内方言の特徴」などの論文を書き、東京の言語関係の雑誌に送り、原稿料を手にしますが生活を賄うほどではありません。「アカ」のレットルを張られた秀一を採用してくれるところなどはありません。父親とも相談しましたが、仮にあったとしても小学校の教員しかない現状です。秀一は「そういう仕事はどうも好きになれないし、さればといってほかにふさわしい仕事など一つもない」、と当時の気持ちを日記に書いています。

秀一にはいつも監視の目が注がれていました。そして最初の逮捕から二か月目の1932(昭和7)年11月、二度目の検挙です。罪状は、プロレタリア作家同盟山形支部準備会鶴岡地区委員会に出入りしたこと。そしてその組織部長兼教育部長に推薦された、というようなものでした。拘束は短いものでしたが、12月には「赤旗」「無産青年」などの左翼文書配布ということで三度目の逮捕となりました。

▶寺の息子として誕生

その年、日本は中国東北部に、傀儡国家「満洲国」をでっち上げました。

中国への侵略を批判する者を治安維持法で弾圧し、共産主義者はもとより自由主義者と呼ばれる人々まで検挙されるような時代になったのです。ヨーロッパではドイツでヒトラーが権力を握りつつあ

り、ユダヤ人への迫害が進行していました。

翌1933年2月、プロレタリア作家・小林多喜二が虐殺され、6月には、日本共産党の中心人物だった佐野学と鍋山貞親が転向した、という記事が各紙に大きく出ました。

そのような中、秀一は『文字と言語』第7号に、「満洲国に於けるローマ字化の一般の方針」という論文を発表しています。当時の中国の全人口4億3千万の約80%に当たる3億5千万人の文盲の原因は、中国語が象形文字のため非常に難しく、それを学ぶ暇と金のある金持ちにのみ都合のいい文字であることを理由の一つに挙げ、こう論じています。

「支那民族にとって、ローマ字化をすすめることは、四億の民衆の民族解放の一つの手段として、支那民族全体が大きな関心をもつべき事項でなければならない」(筆者注：当時は支那語、支那民族は差別語ではなく、中国の人々も支那ということばを使っていた)。

中国では、抗日戦争を闘う文学者の間で、「国防文学論争」というものが起こりました。周揚たちは“国防文学”を、魯迅らは“民族革命戦争の大衆文学”を、という二つのスローガンの下、論争が巻き起こりました。

「国防文学」運動は、ローマ字化と結びつけて闘われていました。秀一は1937

年3月発行の『中国文学月報』第14号に次のような文章を発表しています。

「雑誌やピラで大衆に訴えてみたところで、全国民の80%が明き盲の中国では、容易に反響がおこらない。魯迅氏はかつて、“中国には文字が全くないに等しい”という名言を吐いたが、80%の大衆のために書かれた文章が、僅か20%の知識分子にしか理解されないという大きな矛盾が生まれる。そこでは、大衆に文字を知らせることが国防運動の第一の任務になる」。

混迷の時代を拓くザメンホフの人類人主義「私は人類の一員だ！」

第26回 最後まで戦った斎藤秀一

ジャーナリスト、方正友好交流の会事務局長、著書『ある華僑の戦後日中関係史』

大類 善啓 (おおるいよこひろ)

秀一は、中国の民衆が抗日戦争を闘うためには、文字を普及し社会を正しく認識する文化的な力の重要性を明らかにし、『支那語ローマ字化の理論』を中国エスペラント運動の中心人物である葉籟子や魯迅にも郵送しています。ちなみに葉籟子は、後に中国科学院文字改革委員長になっています。魯迅はしっかりと1936年8月8日の日記に「斎藤秀一『支那語ローマ字化の理論』二冊郵送してくる」と記しています。

また秀一は、上海世界語者協会の機関誌「ラ・モヴァード」に、「日本のローマ字運動史」という論文も書いてもいます。

➤ 日中は全面戦争へ

1937年7月7日、蘆溝橋事件が勃発します。近衛首相は“不拡大方針”を発表しますが、関東軍は意に介さず、日本はどんどん兵を送り込み、中国を侵略し全面戦争へ突き進んでいきました。そのような時代、秀一は山形県庄内平野の一隅から、中国の言語学者や作家らと交流を進めていたのです。

1938年、秀一は「ローマ字ニュース」に、「今、世の中では国粹主義が幅を利かせているが、外国のことでもよい所はこれを採り、たとえ外国人とでも同じ目的をもつ場合は、これと手をつなぐという大国民的態度がいずれの世にも望ましくはないだろうか」と書きました。

中国への侵略戦争を突き進むなか、日本は“大和民族”の優越性を声高に主張し、国体の神聖化を訴えていた時代です。排外的なナショナリズムがますます進行するなかにあって秀一の著作活動は大きな意味があったでしょう。

朝鮮を併合し台湾を植民地にした天皇制日本国家は人々に日本語を強制し、朝鮮語や台湾語などの使用を禁じていた時代です。エスペラントに共鳴していた秀一はもちろん、それぞれの民族語の価値を認めていましたので日本政府の言語政策を受け入れることはできませんでした。

➤ ザメンホフの理想実現へ

そして1937年6月、秀一は全文エスペラントの雑誌『ラティニーゴ』を創刊しました。ラティニーゴ(LATINIGO)とはエスペラント語で「ローマ字化」と

いう意味です。その年の3月、『文字と言語』第11号に次のような文章を発表しています。

「ローマ字運動の国際戦線を打ち立て、それぞれの国に於ける理論と運動の経験とを交換するために、新しい雑誌「LATINIGO」を5月に創刊します。既に支那・ソビエート同盟・シャムの仲間から執筆の承諾を得ています。あなたも外国の仲間にしらせたいこと何でも書いてドシドシ送ってください。使う言葉はエスペラントです」。

日本のエスペラント界は、プロレタリア・エスペラント同盟と日本エスペラント学会に大きく二分されていました。エスペラント学会の機関誌には「皇紀二千六百年」「東亜の指導者日本」など国策に沿い、“聖戦”の一翼を担うような動きが起こっていました。

秀一は、日本エスペラント学会に入りませんでした。そして1938年、治安維持法違反で5回目の検挙を受け逮捕されました。

孤独な厳しい監獄のなかでも秀一は、抵抗の心情を短歌にしましたが、獄中で肺結核になったのです。1940年4月に釈放されますが、9月腹膜炎を併発し自宅で亡くなりました。

高杉一郎は戦後、「日中エスペラント交流史の試み」(『文学』(1966年3月号、岩波書店)のなかで、「文盲を一掃すべきであるとした中国のラテン化運動を、日本のエスペラント運動のなかに、ほとんど完全な形で反映していた。この目だため地方のエスペランティストがじつにねばり強い活動をつづけていたことを私がはじめて知ったのは、1960年に北京を訪れて、葉籟子と雑談しているときだった」と書いています。秀一の名前と功績は、戦後になっても中国で生きていたのです。

また小林司は1993年の「ラ・モヴァード」誌に、「エスペラント運動と斎藤秀一」と題してこう書いています。「秀一は諸民族の間の友愛と正義というザメンホフの理想を忠実に実践したという点では、最も正当なエスペランティストだったといえよう」。

まことに貴重なエスペラント界の人材でした。

この項は主に佐藤治助著『吹雪く野づらに 一エスペランティスト斎藤秀一の生涯』に負っています。